

## 「把」構文」の目的語について

布 川 雅 英

### はじめに

論者はこれまで「把」構文」中のアスペクト助詞の“了”“过”“着”や述語動詞に付加された補語について考察を行ってきた。その結果、アスペクト助詞は形式上、述語動詞に直接付加されているが、意味においては先ず述語動詞の表す動作行為の終結点を明示する成分がつき、その後動作行為が「出来事」として捉えられてから付加されていることが理解できた。また補語の意味上の機能については、第一に「把」構文」に用いられている述語動詞の終結点を明示し、述語動詞の表す動作行為を「出来事」へ変換させる機能を持つこと。第二に中国語の動詞は基本的に動作行為そのものしか表さないために、動詞単独では「把」構文」が表す「処置」が明示できない。したがって、「影響を及ぼす」であるとか「変化させる」といった意味機能を持つ補語が付加されて、具体的な「処置」を表すことができるようになる。よって「把」構文」の成立には補語が必須の成分であることも理解できた。このような考察結果をもとに今回は述語動詞の後に付加されている目的語を考察対象とする。「把」構文」の成立には対象格目的語があれば成立可能である。しかし今回考察を行う構文は、対象格目的語がある上に、さらに述語動詞の後に様々な目的語が置かれて成立する「把」構文」である。このような「把」構文」では目的語はどのような意味機能を持ち、どのように「把」構文」の成立と関わっているの

かを考察して行く。では次に挙げる例を見られたい。例(1)では述語動詞の後の目的語（桌子上）が考察対象である。

- (1) 他把信放在桌子上。(李临定 1993)  
 (彼は手紙を机の上に置きました。)

## 1. 具体的な考察

次の例(1)は述語動詞の後の目的語に“桌子上”が用いられている。この“桌子上”が意味上どのような機能を持ち、「把」構文」の成立と関わっているかを説明しよう。ここではまず述語動詞“放”だけを用いて「把」構文」が成立可能かを考えてみよう。すると“他把信放(彼は手紙を置く)”という文が仮定される。しかしこの文は成立しない文である。なぜならこの文では持続動詞“放”の後に動作の終結点を明示する成分がないため、持続動詞の終結点が明示されない。したがって、「彼が手紙を置く」という動作行為を述べるだけで、「把」構文」の成立に関わる概念である「処置」がこの文から読み取れないからである。では次に“放”の後に場所を導く補語“在(～に)”を付加してみよう。すると“他把信放在(彼は手紙を～に置く)”という文が考えられる。この文では“在”が“放”に後置されることによって、持続動詞“放”が終結点を持ち、動作行為はまとまる。しかしやはりこの文においても、“把”の後の成分“信”に対する具体的な「処置」が明示されず、成立が不可となる文である。では目的語の“桌子上”を“放在”の後に置いてみよう。すると“他把信放在桌子上”となり、この文は成立可能な文である。ではなぜこの文は成立可能となるのであろうか。この文の日本語の意味は「彼は手紙を机に置きました」である。この意味を詳細に考えると「彼の所にあった手紙」を「机の上に移動させた」ということを表していることが理解できる。つまりここからは「彼」を起点にして、「手紙」を「机の上」という到達点(着点)に「移動させる」という「処置」が読み取れるのである。この文においてはこの「移

動」という「処置」を明確にするためには“桌子上”が必須の成分である。例を見られたい。

- (1) 他把信放在桌子上. (李临定 1993)  
 (彼は手紙を机の上に置きました。)

次の例(2)は述語動詞の後に目的語の“广州(広州)”が用いられている。述語動詞“寄(郵送する)”は常識的に「発信人」「受け取り手(受け取り場所)」「発信物」を必要とする。この文では「発信人」が「彼」,「受け取り手(場所)」は「広州」,「発信物」は「お金」である。次にこの文の日本語の意味を考えてみよう。意味は「彼はもう金を広州に郵便で送りました」である。この意味を詳細に考えると「彼の所にあった金」を「広州に移動させた」ということを表している。つまりここからは「彼」を起点にして、「金」を「広州」という到達点(着点)に「移動させる」という「処置」が読み取れるのである。仮に目的語の“广州”がない場合,「彼はもうすでに金を～へ郵便で送りました」となり,到達点(着点)が明示されず,したがって「移動」という具体的な「処置」が明確にならない。この文においてはこの「移動」という「処置」を明確にするためには“广州”が必須の成分である。例を見られたい。

- (2) 他已经把钱寄往广州了. (李临定 1993)  
 (彼はもう金を広州に郵便で送りました。)

次の例(3)に用いられている目的語は受領者目的語が用いられている例である。ここでもまず述語動詞“交(手渡す)”だけを用いて「把」構文」が成立可能かを考えてみよう。すると“我把家庭作业本交(私は宿題帳を手渡す)”という文が仮定される。この文では持続動詞“交”の後に動作の終結点を明示する成分がないため,持続動詞の終結点が明示されていない。したがって,全文の意味が「私は宿題帳を手渡す」という動作行為を述べるだけの文となる。このため「把」構文」の成立に関わる概念である「処置」がこの文から読み取れず,成立が不可となる。では次に“交”

の後に動作の受領者を導く補語“給(～に)”を付加してみよう。すると“我把家庭作业本交给(私は宿題帳を～に手渡す)”という文になる。この文では述語動詞が“交给”となり、持続動詞“交”が終結点を持ち、動作行為はまとまる。しかしどのような「処置」しているのかを考えるとこの文においても、“把”の後の成分“家庭作业本”に対する具体的な「処置」が明示されず、成立が不可となる。では目的語の“老师”を“交给”の後に置いてみよう。すると成立可能な“我把家庭作业本交给老师”となる。ではなぜこの文は成立可能となるのであろうか。この文の日本語の意味は「私は宿題帳を先生に手渡す」である。この日本語訳から内在する意味を詳細に考えると「私の所にあった宿題帳」を「先生の所に移動させた」ということを表していることが理解できる。つまりここからは「私」を起点にして、「宿題帳」を「先生の所」という受領者に「移動させる」という「宿題帳」に対する「処置」が読み取れる。この文においてはこの「移動」という「処置」を明確にするために“老师”が必須の成分である。例を見られたい。

(3) 上午, 我把家庭作业本交给老师了。(刘月华等 1983)

(午前中に私は宿題帳を先生に提出しました。)

次の例(4)も受領者目的語が用いられている例である。この例の述語動詞は“还(借りたものを返す)”である。ここでも述語動詞だけを用いて「“把”構文」が成立可能かを考えてみよう。すると“我把照片还(私は写真を返す)”という文が仮定される。このままでは持続動詞“还”の後に動作の終結点を明示する成分が置かれていないため、持続動詞の終結点が明示されない。したがって、全文の意味が動作行為を述べただけの「私は宿題帳を手渡す」という文となる。ゆえに「“把”構文」の成立に関わる主要概念の「処置」がこの文から読み取れず、成立が不可となる。では目的語の“人家”を“还”の後に置いてみよう。すると“我把照片还人家”となり、この文は成立可能である。ではなぜこの文は成立可能となるのであろうか。この文の日本語の意味は「私は写真をあの人に返す」である。この日本語

訳から内在する意味を詳細に考えると「私の所にあった写真」を「あの人の所に移動させた」ということを表している。つまりここからは「私」を起点にして、「写真」を「あの人の所」という受領者に「移動させる」という「写真」に対する「処置」が読み取れる。この文では“人家”が「移動」という「処置」を明確にするための必須の成分である。例を見られたい。

(4) 我已经把照片还人家了。(李临定 1993)

(私はすでに写真をあの人に返しました。)

次の例(5)は“把”の後の成分が「全体」という概念を持ち、述語動詞の目的語が「部分」という概念を持つ例である。ここでもまず述語動詞“削(削る)”だけを用いて「“把”構文」が成立可能かを考えてみよう。すると“他把苹果削(彼はりんごを削る)”という文が仮定される。この文では持続動詞が“削”で動作性の高い動詞である。これだけでも「りんご」に対する「変化」という「処置」が読み取れそうである。しかしこのままでは成立しない。インフォーマントによると、「意味はなんとなく分かるが、りんごに対する処置をもっとはっきりさせたい」という回答を得た。インフォーマントの意見ではこの文を成立させるには“他把苹果皮削了”あるいは“他把苹果削了皮了”とすべき、との意見も頂いた。これまでも述べてきたように「“把”構文」の成立には“把”の後の成分に対する「処置」を明確にしなければならない。この文で「処置」を明確にする成分はインフォーマントの意見にもあるように“皮”である。この“皮”は一般的な「皮」ではなく、今話題になっている「りんご(全体)の皮(部分)」である。つまりこの文の「皮」は意味上「確定的な皮」である。したがって、確定的な成分が動詞の後に置かれることにより持続動詞“削”が表す動作行為が終結点を持つことになる。さらに「りんごをむく」はただ単に動作行為を述べているだけであるが、「確定的な皮」を述語動詞に置くことにより、「りんごに対する具体的な処置」が読み取れるようになる。この文において“皮”は持続動詞“削”の動作行為の終結点を明示するとともに、

「りんごに対する具体的な処置（りんごを変化させる）」を明確にする必須の成分である。例を見られたい。

(5) 他已经把苹果削了皮了。(李临定 1993)

(彼はもうりんごの皮をむいてしまいました。)

次の例(6)も“把”の後の成分が「全体」という概念を持ち、述語動詞の目的語が「部分」という概念を持つ例である。例(6)もまず目的語を除いた文を考えてみよう。すると、“把他免了”となる。この文の意味は「彼を免じた」となり、このままでは伝えたい内容が不十分である。当然この文からは「彼」に対する「処置」も読み取ることができない。ではこの文で「処置」を明確にする成分は何であろうか。論者の考えでは“免”である。例(6)では「確定的」な“免”を述語動詞“免”の後に置くことで、“免”の表す動作行為の終結点が明示されている。さらに“把”の後の成分“他”が「全体」という内在する意味を持ち、“免”はその「彼」の中の「職」という「部分」を表している。よって、「彼の中の職を免じること」で彼に対する「変化」を表現することができる。この彼に対する「変化」がつまり彼に対する「処置」である。ゆえに“免”は持続動詞“免”の動作行為の終結点を明示するとともに、「彼に対する具体的な処置（彼を変化させる）」を明確にする必須の成分である。例を見られたい。

(6) 把他免了职。(刘月华等 1983)

(彼を免職にした。)

次の例(7)は「結果」を表す目的語が置かれた例である。例(7)ではなぜ目的語の“一个洞”が「処置」を明確にする成分であるのかを説明しよう。述語動詞“挖（掘る）”は論理上動作が持続可能な持続動詞である。“一个洞”は「壁にできた穴」ということで“把”の後の成分“墙”と一種所有関係にある。したがって、この“一个洞”は意味上「不確定な穴」ではなく「確定的な穴」である。ゆえに「確定的」な成分が述語動詞の後に置かれることで、持続動詞“挖”の表す動作行為の終結点を明示できる。よっ

て意味上“一个洞”は述語動詞“挖”の表す動作行為を「出来事」に変換させるために付加されていることが理解できる。次に「処置」がどのように読み取れるのかを考えてみよう。“一个洞”がない文を仮定すると，“他把墙挖了”となる。この文の意味は「彼は壁を掘った」である。日本語訳から判断すると「壁に対する処置」を読み取れなくもない。しかしインフォーマントに確認すると，“他把墙挖了”は不成立である。インフォーマントの意見では「意味が中途半端な感じがする」とか「「把」構文」であるなら、もっと壁に対する具体的な処置を明示しないと成立しない」とのことであった。ではなぜ“一个洞”があると「処置」が明確になるのであろうか。先に述べたように“一个洞”は意味上「確定的な穴」である。この「確定的な穴」という成分を述語動詞の後に置くことにより、「壁に穴をあける」という出来事が具体的にになり、よってここから「壁に対する具体的な処置（壁に対する変化）」が読み取れるようになる。ゆえにこの文では“一个洞”が成立に必須の成分である。例を見られたい。

(7) 他把墙挖了一个洞。(刘月华等 1983)

(彼は壁に穴をあけた。)

次の例(8)も「結果」を表す目的語が置かれた例である。例(8)では“把”の後の成分“面(小麦粉)”が変化してできたものが、述語動詞の後に置かれている。ここではまず述語動詞“擀(麵棒等で押し伸ばす)”と目的語の“面条(うどん等の麵類)”との関係を考察してみよう。“擀”は論理上持続できる持続動詞である。この文の“面条”は一般的な「うどん」ではなく、今押して伸ばしてできた「確定的なうどん」である。したがって「確定的」な成分が述語動詞の後に置かれることで、持続動詞“擀”の表す動作行為の終結点を明示できる。よって意味上“面条”は述語動詞“擀”の表す動作行為を「出来事」に変換させていると理解できる。次に例(8)ではどのように「処置」が読み取れるのであろうか。“面条”がない文は“我把面擀了”となり、このままではただ単に「小麦粉を伸ばした」という動作行為を述べているだけである。ここからは「小麦粉に対する処置」を読

み取ることができない。ではなぜ“面条”があると「処置」が明確になるのであろうか。目的語の“面条”は意味上「確定的なうどん」であることはすでに理解できた。この「確定的なうどん」という成分を述語動詞の後に置くことにより、「小麦粉がうどんに変化した」という出来事が明確になり、よってここから「小麦粉に対して、うどんに変化させた」という具体的な「処置」が読み取れるようになるのである。ゆえに“面条”述語動詞“擀”の終結点を明示するとともに、「小麦粉に対する具体的な処置（小麦粉を変化させる）」を明確にするために必須の成分である。例を見られたい。

(8) 我把面擀了面条了。(李临定 1993)

(私は小麦粉でうどんを打ちました。)

例(9)は述語動詞の後の目的語が対象格目的語で、“把”の後の成分が「処置の対象となる場所」が置かれている例である。ここでもまず述語動詞“浇(水をまく)”と目的語の“水”との関係を考察して行く。“浇”は論理上持続できる持続動詞である。目的語の“水”は一般的な「水」ではなく、今現実にかかれた「確定的な水」である。したがって「確定的」な成分が述語動詞の後に置かれることで、持続動詞“浇”の表す動作行為の終結点を明示できる。よって意味上“水”は述語動詞“浇”の表す動作行為を「出来事」に変換させていることが理解できる。次に例(9)ではどのように「処置」が読み取れるのであろうか。“水”がない文は“我把花浇了”となり、このままではただ単に「花にまいた」という動作行為を述べているだけである。ここからは「花に対する処置」を読み取ることができない。ではなぜ“水”があると「処置」が明確になるのであろうか。目的語の“水”を入れて意味を考えてみよう。意味は「花に水をまく」となる。この日本語訳の表していることは「水が花に移動して花に水が付着する、あるいは水によって花が何らかの変化をおこす」ということである。つまりここから「花に対する変化」が読み取れる。この「変化」が「花に対する処置」なのである。したがって目的語の“水”は述語動詞“浇”の終結点を明示す



るとともに、「花に対する具体的な処置（花を変化させる）」を明確にするために必須の成分である。例を見られたい。

(9) 我把花浇了水了。(李临定 1993)

(私は花に水をやりました。)

例(10)は述語動詞の後の目的語が道具格目的語である。この場合どのように「処置」が表されているのか考えて行こう。この例の述語動詞“过(通す)”には“一遍(一度)”という動作行為の回数を明示する動量補語が付加されている。これによって持続動詞である“过”の表す動作行為の終結点を明示でき、“过”の表す動作行為を「出来事」に変換させている。したがって、“筛子”がなくても、“把粮食过了一遍”は成立が可能となりそうである。しかし、現実にはこれはただ単に「穀物を一度通した」という意味を述べているだけで、ここからは「穀物に対する処置」を読み取ることができず、この文は成立しない。ではなぜ“筛子”があると「処置」が明確になり、成立可能となるのであろうか。目的語の“筛子”を入れて意味を考えてみよう。意味は「穀物を篩に一度かけました」となる。「篩にかけられる」ということは「もともとあった穀物が分類選別される」ことを意味している。この「分類選別」が「穀物に対する変化」なのである。この「変化」が「穀物に対する処置」なのである。ゆえに目的語の“筛子”は「穀物に対する具体的な処置（穀物を変化させる）」を明確にするために必須の成分である。例を見られたい。

(10) 把粮食过了一遍筛子。(刘月华等 1983)

(穀物を篩に一度かけました。)

## 2. まとめ

以上「把」構文」に用いられている述語動詞の後の目的語について、その意味上の機能と「把」構文」の成立にどのように関わっているのか

を考察した。この考察の結果を次の2点にまとめたい。

第一に述語動詞に付加された目的語は述語動詞の動作行為を制約し、述語動詞の表す動作行為を「出来事」に変換させる機能を持つ。

第二に目的語を付加することで、“把”の後の成分に対して「移動」あるいは「変化」を明確に表すことができるようになる。よって「“把”構文」の主要概念である「処置」と適合し、目的語が「“把”構文」の成立に関与していることが理解できた。

これまでの先行研究では「“把”構文」の成立には述語動詞に補語などの成分を付加しなければならないという説明がされてきた。しかしながら、なぜ述語動詞に様々な成分を付加しなければならないのかは、あまり論じられていなかった。今回の考察で少しは答えを出すことができたと思うが、今後もさらに様々な成分の考察を行って行きたい。

#### 参考文献

- 龚千炎, 1995, 『汉语的时相 时制 时态』  
加藤宏紀, 2002, 「現代中国語の「時相」と「時態」の意味研究」, 『言語と文化論集』, 第9号, 神奈川大学大学院外国語学研究科  
李臨定, 1993, 『中国語文法概論』(宮田一郎訳), 光生館  
刘月华等, 1983, 『实用现代汉语语法』, 外语教学与研究出版社  
布川雅英, 2004, 「“把”構文」の述語動詞に付加される補語の意味的特徴」, 『明治学院大学教養センター附属研究所カルチュラル』, 創刊号